

子どもの成長見守り70年

現役アドバイザーとして活動

22歳の時、県職員として児童相談所に就職した。そこから子どもの付き合いが始まりおよそ70年。寒川さんの周りにはいつも子どもがいて、その時、その時代の子どもたちを見つめながら過ごしてきた。「子どもがかわいくてかわいくて、子どもと遊べるのが何よりうれしいんです」と顔をほころばせる。

この道に進むきっかけは1950年、立命館大3年生で心理学を専攻していた寒川さんが徳島新聞に掲載された記事を目にしたことだった。4歳の知的障害児を持つ母親が、子どもを木にくくりつけて仕事をしているというもの。当時知的障害児のための施設や学校はなく、母親に他の手段はなかった。その後、状況を知った人々が募金活動を始め、その活動が行政を動かして県立あさひ学園ができた。一連の報道を目の当たりにし「こういう子どもたちを助ける仕事をしよう」と決意した。

親子と向き合い共に学ぶ

児童相談所に心理職として就職した後、徳島県で児童心理学の第一人者として子どもたちへの支援にあたった。当時知的障害児への支援や対応はまだまだ整備されていなかった中、自閉症や発達に問題のある子どもたちと向き合い、支援する方法を模索した。そのころに寒川さんが受け持った子どもたちは、今はもう高齢者になる。

その後はあさひ学園園長、児童相談所所長などを歴任。アメリカやイギリスに渡り、自閉症児や発達障害児に関する研修も受けた。県職員を早期退職し、「やはり現場で子どもと関わりたい」と徳島文理大付属幼稚園の園長を同大教授と兼務して20年以上務めた。現在も月2回、徳島市籠屋町の「子育てほっとスペース すきっぷ」で育児講座のアドバイザーとして出向く。子どもたちへのお決まりのあいさつは「じいじが来たよ。パッ、パッ、パッ、パッ、ハンマンマン、ママ、ママ」。



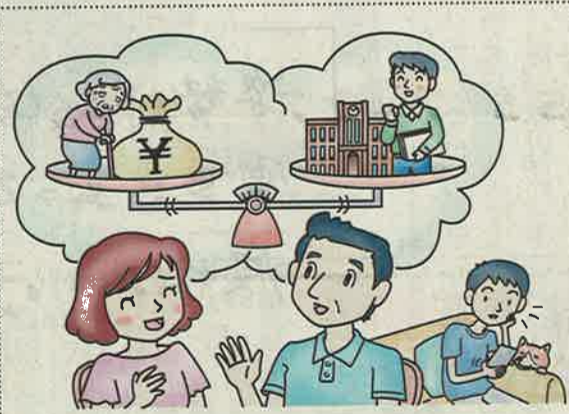
子どもたちと触れ合いながら育児アドバイザーを務める寒川さん。徳島市籠屋町商店街の「子育てほっとスペース すきっぷ」

自身のことを「学者ではなく、実践者」と話す。論文やデータも大切だが、それ以上に目の前の子どもや母親たちと向き合う中で、そこから学んだり親子の悩みを解決できたりすることが多いという。

暮らし

子どもの成長とともに、子どもに掛かるお金が家計に占める割合「エンジェル係数」も増えていきます。特に高校卒業後に必要なお金は短期間で高額になり、保護者は大変です。国立大学に自宅から通った場合、学費が約300万円、下宿をすればプラス500万円、私立大学だと学費が多くなる分、合計で1000万円を超えるでしょう。きょうだいがいれば人数分、増えていきます。

互いの必要額見極めを



教育、老後資金のバランスが重要 (イラスト・原澤美紀)

子どもに掛かる500万円〜1000万円を使い過ぎ、子どもが自立した後親の老後は、使わなければ老後の収入の予想、年金額、2000万円不足というニュースをきくか、漠然と抱いている不安が現実的な数字として迫ってくるように感じている人も多いでしょう。

子どもに多くのお金を使えば、子どもが自立した後に親の老後が心配です。お金の問題は、進路選択は子ども自身で決めるべきですが、進路選択は子どもの問題です。「あなたのために準備できるお金はこれだけです。この範囲内であなただけが良いと思う学校を選択してね。もし費用がもっと掛かるなら、何かいい方法はないか、一緒に考えましょう。」お互いの立場を尊重し、最大限の注意を払って意思疎通を図ることは、お金の限らず家族の多くの問題を解決するカギとなるでしょう。(鶴田明子・家計と暮らしと住まいの相談室相談員)

社会貢献活動 高校生が発表

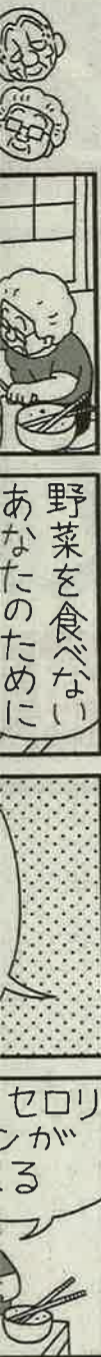


横浜市で開かれた「高校生ボランティア・アワード2019」で活動を発表する高校生ら

横浜で催し 全国約100校の生徒参加

社会貢献活動に取り組む全国の高校生が参加、交流するイベント「高校生ボランティア・アワード2019」が横浜市で開かれた。約100校の生徒が、授業で学んだ技術やアイデアを生かした活動を、会場のブースで来場者に発表した。

主催は、歌手さだまさしさんが設立した公益財団法人「風」に立つライオン基金。社会福祉や地域の活動に頑張る高校生を顕彰する目的で毎年開催し、今年で4回目だ。



(三浦麻衣)